

## 館長時代の思い出

万波通彦

京都大学では各部局の図書室が整備されています。私には、附属図書館は自分の専門以外の特別な調べ物をする場所ではありませんでした。その附属図書館の館長に任命されたのは定年の一年前でした。前館長の長尾真先生の路線完成を工学部の誰かがやれという理由で選ばれたと思っています。

館長として図書館全体を見渡したとき、改めて驚いたことは、学部学生の利用が多いにもかかわらず、一般図書の購入費が僅かなことでした。過去百年間の先人の努力で附属図書館には立派な蔵書が揃ってはいるものの、一般向けの新刊書は多くありません。カリキュラムに関わる施設以外の学生向けの施設が、学部教育に重要な役割を果たしていることは言うまでもありません。学生の利用しやすい附属図書館もその重要な施設の一つです。すべてが図書利用者ではないにしても、一日平均1830名の学部学生が附属図書館に入館しています（平成8年度）。幸いにその年度は、当時の総長井村裕夫先生のご配慮により学長特別経費で多くの新刊書を買いましたが、このような貧しい一般図書購入費が何年も続けば、附属図書館はその機能の一部が果たせなくなると心配しました。

在任期間中のことで図書館の年代記に書かれるのは「電子図書館」の設置と「図書業務システム」の更新でしょう。特に「電子図書館」とは何かも分からずにその誕生に立ち会うことになりました。私は図書館のホームページで蔵書の検索ができる程度なのが電子図書館の機能と思っていました。インターネットを使えば、自分の机の上で多くの学術雑誌の論文タイトルが読め、論文検索ができます。それに加えて、それまで読みたくても入手できなかった書物が無料で入手できました。図書室とは関係なく必要な情報が利用できるのですから、これが電子図書館と結びつくとは思いませんでした。

たしかに、電子化情報は誰かが作らなければなりません。京都大学の電子図書館では「京大

エンサイクロペディア」と言うキャッチフレーズで代表される情報発信が目玉でした。従来からネット上で公開してきた貴重書画像の充実に加えて、京都大学の学術情報をインターネットを通じて内外に発信します。最初から予想していた通り、学内で出版され、学会で評価の高い学術雑誌はエンサイクロペディアに含めることは出来ませんでした。京都大学百年史、博士学位論文論題一覧等が順次入力、公開されているようです。貴重書画像の公開は附属図書館のセールスポイントの一つですが、公開の仕方、書物の選択には慎重な配慮がいるのではないのでしょうか。知る限りでは、大きな公共図書館でも大学図書館でも、このような貴重書画像を大規模に公開をしているところはありません。

京都大学の附属図書館である限りは、京都大学内へのサービス（情報配信）が不可欠です。図書館事務部長の高橋柏氏等の努力で学内向けの電子ジャーナルも不十分ながら32タイトル、ネット対応の各種CD-ROMも充実できました。よく言われるように情報は無料ではありません。電子ジャーナル、ネット対応CD-ROMを今後どのように維持充実させるかという大きな問題を残してしまったと思います。

図書館長が兼ねる京都大学百年史編集委員長の仕事は、服部春彦教授（文学部）を始め多くの方々と百年史編集資料室の西山伸さんの努力で予定の出版は無事終わりました。校正段階では京都大学の歴史を丁寧に読みました。今から思えば楽しい経験でした。館長として勤務したのは一年間、歴代館長の中で最短記録です。何もしなかった言い訳とします。前館長長尾真先生が引かれたレールを走るのがやっとでした。電子図書館の情報発信・配信に悩みながらも、脱線しなかった（？）つもりですが、ひとえに支えて下さった事務部長を始め図書館職員のおかげと感謝しています。それにしても素晴らしい一年間でした。

（まんなみ みちひこ：元附属図書館長）